

## 国内研修 研修成果報告書

### 1.はじめに

私は同じ専門ゼミの5人と共に2017年2月6日から3日間、京都市と神戸市を訪れた。そこで、心のケアを必要とする子どもたちへのサポートのあり方を学ぶため、国内研修を行った。日程としては、2日目にNPO法人「子どもの心理療法支援会 サポチル」を訪問し理事長の平井さんからお話を伺い、3日目に「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」を訪問した。

私は大学で心理学を学びたいと考え始めたときから、心の問題を抱える子どもたちに関わる心理について興味を持っていた。そして、大学生となりゼミや授業で学ぶ中で座学だけでは見えてこない部分を知りたいと思い、国内研修を企画した。

まず、「子ども」「心理療法」というおおまかな研修テーマを決め、自分が学びたいことに合う研修先を探した。その中で、NPO法人「子どもの心理療法支援会 サポチル」を見つけた。この団体を訪問することで心の問題を抱える子どもたちをどのようにサポートできる環境へつないでいるのかを学ぶことができると考えた。また、どのような経緯でこのようなNPO法人を立ち上げようと思ったのかについても興味がわいた。そこで、直接話を聞きたいと考え、アポをとり理事長の平井さんに話を伺うことになった。

次に、研修先が関西に決まったところで、今まで私自身が阪神・淡路大震災について一度も深く勉強をしたことがなかったことに気付いた。阪神・淡路大震災の年が「ボランティア元年」と呼ばれていることは知っていたため、阪神・淡路大震災について学ぶことで、被災者の心理状況や心理サポートについて知ることができると考えた。また、震災時に子どもたちがどのような心理ケアを受けたのか、そして、その子どもたちが現在どのような心理的状況にあるのかも知りたいと考えた。そこで、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」の訪問を決めた。

### 2.NPO法人「子どもの心理療法支援会 サポチル」

サポチルは大きく分けて2つの活動を行っている。

一つ目は、子どもたちへの心理療法支援である。児童福祉領域の対象となる子ども、例えば、児童養護施設や母子生活支援施設などに入所している子どもと、発達障害をも

つ子どもが心理療法を受けられるように資金面で支援をしている。具体的には、児童福祉領域の対象となる子どもには1回のセラピー代5000円をサポチルが全額負担し、発達障害の子どもには1回のセラピー代のうち、3000円分をサポチルが補助している。また、京都の御池心理療法センターと大阪の大阪心理臨床研究所・京橋心理相談室に委託し、京都と大阪の2カ所で、子どものアセスメントや心理療法、および保護者・関係者へのコンサルテーションを行っている。サポチルの理事長である平井さんは御池心理療法センターの所長でもあり、私たちは御池心理療法センターを訪れ、そこで平井さんからお話を伺った。

二つ目は、高い専門性を有する人材の育成および専門的知識の普及である。専門家育成のために研修会やセミナーを開催している。

サポチルの理事長である平井さんにお話を伺って、得たものがたくさんあった。その中で印象に残っているのが日本の心理サポートの現状についてのお話である。日本には児童相談所や教育相談センターがあり一見心理サポートが充実しているように感じる。しかし、サポートする側の専門性が評価されておらず地位が低かったり、国のお金を使って制度を充実させていこうという世論がなかったりするため、形だけで終わってしまっているのが現状である。平井さんはこの状況を「日本はよその子に冷たい」と表現していた。もっとみんなが社会の状況に目を向け、これからの日本を支える存在である子どもたちについて考える必要があると感じた。

もう一つ印象に残っているのがトラウマの第2・3世代の影響についてのお話である。東京大空襲や東日本大震災、虐待などでトラウマを抱えている人が親になったとする。そうすると親はトラウマについて子どもに話せないため、子どもは親のトラウマの原因を知らず、「何か分からない恐怖に脅かされている」と感じる。こうした養育環境で育った子ども、つまりトラウマの第2世代は何らかの心理的問題を抱え、また第2世代が親になることで第3世代へと影響が続いていってしまうということである。トラウマを受けた本人はもちろんトラウマについて触れようとせず、さらには社会までもがトラウマはないものだとする傾向にある。そのため、誰かしらがこの状況に手を差し伸べ世代間伝達を断つように支援をする必要があると強く感じた。

### 3. 「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」

この施設は、阪神・淡路大震災の経緯と教訓を未来に伝え、防災・減災社会の実現のために必要な知識を学ぶことを目的としている。館内では展示資料や当時の映像、震災体験者の話などに触れられるようになっている。館内は観覧順序が決まっていて、まず始めは「震災追体験フロア」に通される。そこでは、阪神・淡路大震災の地震破壊の様子を再現した映像、復興に至るまでのまちと人を直面する課題とともに描いたドラマ、そして震災直後のまち並みのジオラマ模型を見ることができる。次が「震災の記憶フロア」である。そこでは、震災関係資料を提供者の体験談とともに展示してあったり、震災体験を被災者が語るビデオが見られるコーナーがあったりする。次が「防災・減災体験フロア」である。そこでは、楽しみながら災害や防災について学べるパズルや実験装置、災害時に役立つグッズが置かれている。そして最後が「水と減災について学ぶフロア」となっている。今回、最後のフロアは時間の関係で行くことが出来なかった。

一番印象に残っているのは「震災追体験フロア」である。地震破壊の映像は再現映像とは思えないほどのすさまじさで、私たちがこの施設に来るまでに通って来たまちや駅が破壊されていく映像には息をのんだ。このフロアにいたときの私含めみんなの緊迫した空気を今も覚えている。震災はたとえ日本で起きたとしても震災が起きた地域外の人にとっては他人事であり、自ら知ろうと思わないとなかなか触れる機会がない。しかし、今回阪神・淡路大震災について学び、やはり他人事で終わらせることなく学ぶべきだと感じた。そうすることで自分自身の防災・減災意識にもつながるし、他者を理解しようとする気持ちにもつながると考えたからだ。

また、「震災の記憶フロア」での資料も心に迫るものがあった。医師であるのに目の前で死にそうになっている子どもを助けることができなかった人の資料や、家族がみんな死んでしまい一人取り残されてしまった幼い子どもの資料などがあった。そこで思ったのがみんな震災について後悔を抱えているということである。この方たちの後悔を前向きなものに変えていくのが心理を学ぶ者の役目であり、このトラウマを次世代に続かせないようにするのが心理を学ぶ者の役目であると強く感じた。

#### 4.最後に

今回の研修を経て、自分と違う境遇にある人への理解を深めることの重要性を感じた。児童養護施設で暮らす子どもたち、発達障害の子どもたち、こういった子どもたちを支援している心理職の人たち、大きな震災にあった人たち、震災があったまちに暮らす人

たち。言葉で表すのは簡単だが、本当にこの人たちの置かれた状況や心理面を理解するのは難しい。しかし、研修で得たことを踏まえてこれから大学で勉強していく中で、多くの人の心に寄り添えるような人間に成長していきたい。